The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪市南部における方言アクセントの変遷
Author(s)	武田, 佳子
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49397
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【42】

氏　　名	武　田　佳　子（たけだ　よしこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２２６２３　号
学位授与年月日	平成21年３月24日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**大阪市南部における方言アクセントの変遷**
論文審査委員	（主査） 教　授　真田　信治 （副査） 教　授　土岐　　哲　　准教授　渋谷　勝己

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、大阪市南部における方言アクセントの変遷を社会の変化にも目を向けて通時的な観点から体系的に捉えたものである。具体的な変遷を記述しつつ、アクセント変化の方向性とメカニズムを解明した。

論文は 2 部構成で、第一部（序論）では研究の目的と前提を述べ、第二部（本論）では各テーマについてのデータの分析と議論を行い、そこから導き出した結論を述べている。400 字詰め原稿用紙にして約 460 枚の分量である。

第一部は 5 章から成っている。各章の内容は次のとおりである。第 1 章：本研究の目的と問題のありか、第 2 章：先行研究をもとに大阪方言アクセントの体系と幕末から現在までの変化についての研究を整理、第 3 章：大阪市の歴史的な変遷－市域の拡大と人口の推移－大阪方言のバリエーションと本研究で対象とする大阪方言について、第 4 章：アクセントについての私見と本研究で使用するデータの処理方法についての説明、第 5 章：研究手順の概要と本論で使用したデータについて。

第二部は 5 章から成っている。各章の内容は次のとおりである。第 6 章：高起無核化の拡大、第 7 章：二拍格助詞〈から〉の音調の変化、第 8 章：二拍助詞〈さえ〉〈こそ〉〈だけ〉〈より〉〈ほど〉の音調について、第 9 章：二拍 5 類名詞の現在。以上の第 6 章から 9 章までは世代ごとのデータを示して変化の実態を明らかにするとともに、その変化についての分析を行い、それぞれの項目について考察している。そして、最後の第 10 章では第 6 章から 9 章の分析をもとに、それぞれの変化について総合的に考察し、それらの変化が意味するところについて検討して、結論として得られた大阪方言アクセントの変化の方向性について述べている。以下、第 9 章で分析・考察を行っている項目と結論とを掲げる。

大阪方言アクセントの特徴の一つに、二拍 5 類型の名詞に見られる拍内下降がある。しかし 1980 年にはすでに、当時の若年層で拍内下降の音調が消失しつつあることが指摘されており、当時の若年層は現在では中年層になっている。大阪市南部の中高年層では、中年

層の女性 1 名をのぞく中高年層全員がある程度の割合で二拍 5 類型名詞の読み上げに拍内下降の音調を使用している。読み上げ文で拍内下降を使用しなかった唯一の中年層の女性は、二拍 5 類型名詞に高起語が後接する場合には、拍内下降に相当するところに低と高の中間的な音調や L などの代替的な音調を使用していた。この微妙な音調の使い分けは、高起語無核語に高起語が後接する場合によく使われるイントネーションと共通するものであるが、当該の中年層話者にとってはこの微妙な音調もアクセントとしての意味を持つと思われる。拍内下降を保持している人も、一つの文中に同じ語が二回含まれている場合の二度目や軽く言う場合などの丁寧ではない発音では拍内下降は現れず、代替的な音調になっているが、これらはイントネーション的なものであると思われる。中高年層が読み上げ文で使用した二拍 5 類型名詞の音調は、後接語の 1 拍目との相対的な関係で判別すると、高起語が後接する場合の 5 種類、低起語が後接する場合の 4 種類の計 9 種類に上る。若年層は専ら LL か LH の音調のみを使用し、どちらを使うかは、後接語がどのようなアクセント型もしくは接続規則を持つかによる「環境による切り替え」を行っているが、いずれも上の世代が使用している音調の一つである。若年層の使用音調は中高年層の使用する音調との連続体である可能性が強い。

論文審査の結果の要旨

本論文において調査研究の結果として提出された見解のうち、ポイントは、以下の 3 点に要約される。(1) 変化か違いか；調査対象にした大阪市南部は明治末から昭和初期にかけて形成された町であり、先行研究の初期落語データの話者は旧幕時代からの市街地である旧市内出身者が多いことから、その二者の差が変化により生じたものか、もともと差異のあったものかは断定できない部分もある。しかし大阪市南部への移住者の中には旧市内からの人たちもおり、大阪市南部自体も町として 1 世紀近い歴史を持つ地域である。生活の場としての旧市内地域が社会状況の変化や戦災で失われてしまった現在、大阪市南部地域はある程度旧市街地のことばも受け継いだ大阪市方言の一地域として位置付けられる。(2) 共通語の影響；共通語の影響は初期落語データにも見られ、その歴史は古い。格助詞「の」による高起無核化、特に若年層に顕著な単語の高起無核化は、マスメディアを通しての共通語の影響が大きい。しかし「の」による高起無核化も単語の高起無核というアクセント型も伝統方言に存在する。若年層は共通語に影響され大阪の伝統方言とは異質なものを取り入れたのではなく、共通語に刺激される形でもともとの大阪方言が持っている特定の形を多用しているものと思われる。(3) パターン化；一部の二拍助詞で、伝統方言とは異なる接続規則として、無核語に後接する場合に HL が多くみられる。それぞれの助詞により HL の出現割合には差があるが、格助詞「から」の場合は高年層でもかなりの割合で無核語に後接する HL がみられることから、変化の始まりはそれより上の世代だと思われる。その「から」を筆頭に、文中では低接で落ち着いているが、文節になると一部の人が HL を多用する「より」まで、変化の始まりの時期には差はあっても、方向としては「二拍助詞は無核語には HL で接続する」というパターン化に向かう動きがあるようである。

本論文で明らかにされた重要なことは、若年層における特徴とされるもののほとんどが上の世代にも存在するという点である。一見変化しているように見える若年層の使用する音調は、個々のものを取り上げれば上の世代とは異なるもののように見えても、それらはいずれも伝統方言アクセントの体系にあるものばかりで、大阪方言と異質なものを取り入れて使っているわけではない。しかし世代が下がるほど簡略化、単純化の方向に向かっていることもまた確認されるのである。この点、言語変化の方向性とメカニズムを具体的事例によって検証したものとして本論文は高く評価される。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。